NPO法人　たんばぐみ

第1回兵庫県集落自慢大会　2005 in 今田　2006.2.12.　atさぎそうホール

1.基調講演;
「コミュニティ再生と持続可能な地球－Think Global／Act Localなまちづくり－」
東京大学　都市工学科　教授　大方潤一郎 氏

2.兵庫県集落自慢大会
①どろんこ会　（丹波市）　②深江地区まちづくり協議会（神戸市）　③上久下地区（丹波市）
④川代ダム野鳥愛護協会（篠山市）　⑤養田まちづくり委員会（加古川市）
⑥福田おいやか村（丹波市）　⑦福本お役に立ち隊（神河町）　⑧日置里づくり協議会（篠山市）
⑨岩崎村づくり委員会（養父市）

第1

2006年3月26日発行

主催；NPO法人 たんばぐみ
地域ビジョン委員会
住民主体の魅力ある地域づくりグループ
ひょうごふるさとづくり交流会議

後援；兵庫県

第1回 M-1 グランプリ開催報告 2005

1.基調講演;コミュニティ再生と持続可能な地球－Think Global/Act Localなまちづくり－

東京大学都市工学科教授　大方潤一郎 氏

10年ぐらい前からまちづくり条例をつくるのに関わっている。4年前に篠山市のまちづくり条例を調査に来て、市や県と縁ができた。

今日は、コミュニティ再生は持続的な地球環境を維持する上で大切なことだという視点に立って、これからのまちづくりについて話をしたい。

目次:

1.基調講演	1
2.兵庫県集落自慢大会	2
①どろんこ会　（丹波市）	2
②深江地区まちづくり協議会（神戸市）	2
③上久下地区（丹波市）	2
④川代ダム野鳥愛護協会（篠山市）	3
⑤養田まちづくり委員会（加古川市）	3
⑥福田おいやか村（丹波市）	3
⑦福本お役に立ち隊（神河町）	4
⑧日置里づくり協議会（篠山市）	4
⑨岩崎村づくり委員会（養父市）	4

大方潤一郎氏プロフィール
1954年川崎市生。東京大学都市工学科の学部・大学院を経て、同助手、横浜国大助手・講師・助教授（工学部建築学科）後、1996年東京大学都市工学科助教授、99年から教授。専門は都市計画、土地利用計画。研究テーマは、土地利用規制・誘導手法と土地利用実態との関係性。ここ数年は、「まちづくり条例」の策定・運用を通じた都市成長管理・既成市街地更新管理、IT技術を活用した参加型計画策定手法。2003年度から21世紀COE「都市空間の持続再生学の創出」の事務統括担当。

■コミュニティ再生の必要性

日本は人口減少だが、世界は人口が増え続けている。人口が増大する中で先進国は、少子高齢化、人口減少を迎えている。大半の国は人口増で、都市型社会へ移行。このためアメリカ型の多量消費型社会ではなく、スローライフのような新しい幸せな生活スタイルの提案が期待されている。皆さんのまちづくりは、まさに新しい生活スタイルを実践している活動だ。21世紀は持続可能性を求めて、ローインパクトなおだやかさとアダプトビリティ（しなやかな）多様で、外的諸変化への適応性が重要だ。そして安心安全なセキュリティのある環境。こうした下で人々の才能が花開くすこやかな暮らしが実現できる。ところが実際は、街の公共空間は殺伐としてふれあいなし。自然が荒れ、不安を抱えている。そんな中でコミュニティ再生をどうしていくのが課題。政府の都市再生は、不良債権の促進と都市問題関連産業の再生。相変わらずハードなものに税金をばら撒いている。本来は、持続可能なコミュニティの再生を目指すことが必要。地域社会と緩やかにつながりながら身の丈にあったペースとスタイルで暮らせるマチやムラの生活を再構築する。例えばアーバンビレッジ－車なしで歩いて暮らせる、通りに活気、心地よい公共空間、乗り降りしやすい公共交通、ヒューマンスケール、多様な用途の適度な混在。地面に接した生活。ゆっくり時間をかけて創り出していく。

■人口減少社会のまちづくり

東京でも2015年から人口減少になる。2030年に高齢化が一段落する。しかし高齢化とともに単身世帯が急増。独居老人の増大。2050年には高齢者の半分は独居と予想されている。郊外の大きな家はもたなくなる。若者が少なくなれば、60代・70代も働く、女性も社会に出る。そういう人達が働きやすく、暮らしやすい街をつくる。郊外では、空き家が急増する。都市でも空洞化し、過疎化する。もう一度魅力を掘り起こして、いかにして魅力ある地域として創り直して行くかが求められている。そのためには、かけがいのないものを大切にする。長く、使い続けていく。試行錯誤しながら様々な生活スタイルの場所を用意する。スローライフ、スローフードの暮らし。パーソナルなマーケットを実現する。機能性だけでは愛着はわかない。地域の潜在性をどう魅力に変えていくことができるか。歴史も物として残っているだけでなく、街割りや建っている建物の型とか周りの環境スタイルは受け継がれ残っている。使い方や作法や雰囲気は暮らしによって受け継がれていく。この街のDNAがあってはじめて愛着がわく。古いものを凍結保存するのではなくて、新しく新陳代謝しながら、何かを継承していく、時代の求める新しい機能も付加していく、そういつた環境を創り出していく必要がある。

■これからのまちづくり課題

施設は舞台装置。その舞台でどういう生活をするかが重要。ハード整備は、新しい動きを引き出すための引き金にする。みんなで知恵を出し合い実践すれば、地域は変わる。

今日は、地域のそうした経験の成果と知恵が報告される。コミュニティを再生するこれからのまちづくりのきっかけとして欲しい。

第1回 M-1グランプリ開催報告 2005

⑦福本お役に立ち隊（神河町）－夢実現の夜空に花火の大輪の和－

◎審査員特別賞受賞

地元消防団を退団した5人の仲間が、今までに培ったパワーと行動力を、福本をよくするために活かそうと結成。「福本区民のこころの2℃上げよう」を合言葉に、知恵を出し合いながら「自分たちができることをできる範囲で」をモットーに地域住民といっしょになって、楽しく元気な福本づくりに取り組んでいます。

昨年11月に神崎町と大河町が合併して誕生した神河町。49の集落で、4100世帯、人口13600人県下で最も人口が少ない町です。福本は南の玄関口に位置し姫路と但馬を結ぶ国道312号が通過する街。920人309世帯神河町でも1・2位を争う街。旧石器から奈良時代の福本遺跡や大化の改新前の播州大寺の縁起物語りが伝わっていたり、江戸時代には1万石の福本藩の陣屋町として、昔から中播磨の中心地として栄えてきた。心の温度を二度上げようということを合言葉にお役に立ちたいの活動を展開している。福本は消防団の活動で知られており、平成6年と16年には全国大会に出場し3位2位という成績を上げている。全国24850の消防団を代表する成績を収めている。年間150日ぐらいの消防団活動がある。退団してからその経験を何かに役立てようということで、お役に立ち隊を結成した。自分達の団結力とパワーで何ができるかなと協議し、夏祭りを盛り上げようということになり、本格的な花火職人を呼んで花火を上げようという事になった。区民の方に賛同を呼びかけ基金を設立。ポスターを作り寄付を募った。平成11年の夏祭りで50発の花火を上げることができた。住民から大変喜ばれた。自分達の力で50発の花火が上がった。昨年は90発と仕掛花火を2基用意することができた。今も継続して寄付をいただいている。次に秋祭りを盛り上げようということで、区民に呼びかけお店を出してもらったり、ステージイベントで寸劇をやったりしている。次に初詣に向けてイルミネーション作りを行い昨年は1万球、今年は2万球のルミネーションを他団体の協力の基に設置した。高校生や中学生も協力してくれている。広報は全戸配布ではなくコミステーションを利用し女性の口コミを引き出している。こうした活動が刺激になり、熟年層を中心に歴史文化研究会を組織し、福本の歴史をまとめた冊子を発刊し、観光ガイドを組織し取り組んでいる。この他アゲハ祭りや1㎡花壇コンテスト、婦人会の講習支援等を行っている。既存団体の仲介役を果たしている。人そのものが福本の宝であり、次代の子供達に福本のDNAというべきにおいをつけていきたい。　（発表: 澤田俊一）

⑧日置里づくり協議会（篠山市）－里づくりから軒先ミュージアムへ－

◎審査員特別賞受賞

軒先…。人と人とのふれあいを育む舞台ともなる所。昨年秋、この「軒先」空間に注目し、道文化の薫るにぎわいと美しさのある街道筋を甦らせたいと「ひおき軒先ミュージアム」を開催しました。街道村のたたずまいのあり方を考えるわたし達のチャレンジです。

日置の自慢は、一つはほんとに寝食を忘れて行事に取り組んでくれる立派な役員がいるということ、二つ目は素朴で純朴で村に生きがいを感じてくれる住民ばかりであると、この二つです。今日はこれまでの活動を振り返りたい。日置の街はとても歴史のある街で、旧街道に沿って発達した宿場街です。かっては役場もあった。商店街として発達してきたが、70軒もあった商家が現在は11軒に減っている。戸数は115だったが現在は93戸に減って空き家になっている。少子高齢化が進展し2軒に一軒はお年寄りを抱えている。乱開発の予兆、通過交通の増大といった危機感の中から、篠山市の里づくり条例に飛びつき、平成13年に日置里づくり協議会を設立した。土地利用、景観形成、コミュニティの3部会の重層構造で取り組み、日置を美しくしていくことを目標とした。人情、文化、街も美しくしていこうと、パラダイムを二つ定めた。ひとつは、みんな心を一つにした取り組み、もうひとつは何事も全てボランティアで取り組むこととした。平成13年には街並み形成や将来展望を冊子にまとめ、14年度は沿道花飾り事業の推進と篠山川沿いに桜並木の植樹を行った。15年は転作空き地の公園整備を行った。16年度は2箇所に40mの花壇作りを行った。そのほか数々のイベントを開催した。そういう取り組みの上に軒先ミュージアムを開催した。はじめは、屋号調べだったが、女性委員を中心に古着の布を使って暖簾を飾ることとなった。合言葉はあなたの出番ですよ、そして大成功したと自負している。女性の活躍の場を用意したこと、隣保単位で創意工夫したこと、屋号調べは子供達の協力があったことだ。知事や県民局長を始め、多くの人が訪問され直接対話があったこと、この対話こそまちづくりの活力だと思っている。　（発表: 中西俊夫）

⑨岩崎村づくり委員会（養父市）－誇りを持って取り組む人づくり和づくり－

◎最優秀賞

集落を守っていくために、豊かな自然環境や地域に伝わる資源・伝統などを活かして、定住と交流の村づくりを進めています。都市部の学生の参加も得て、地域間交流拠点の「円座舎」、地域特産品の「加工場」自力建設に取り組んでいます。また、住吉浜手まちづくり協議会、野田北ふるさとネット、春日野道商店街などと、農産物の販売を通じた交流も行っています。

山奥の24軒の村からやってきました。村の規約が自治会を中心に決めてきたため、女性の声が届きにくい。上意下達で仕事をやってくれといっても結果は同じでも楽しくないのではないか。下から沸きあがってくる方が楽しいのではと考えた。高齢化率40%、その中で在職者は74名、在村者60名実質は年寄りばっかりだ。子どもも非常に少ない。まちづくりに取り組むことはその地域に誇りを持つこと。都会は、アメリカナイズされていると言うが、岩崎の方がよっぽどアメリカナイズされている。昔は組織があって集落があって、俺の家がある、これが当たり前、ところが俺の家があって岩崎があるに変わった。それに危機感を持ちみんなが心を一つになって、地域づくりに取り組む。この地区に誇りを持ってもらう。本当の潜在的な目的は、人づくり和づくりである。自治会の組織の中で何とか動いていただこうとして村づくりに取り組んだ。岩崎には500年のシイの木の巨木の群生が神社にある。竹で覆われているので5年かけて伐採することとした。青年協力隊を受け入れることにし2泊3日でホームスティしていただき、都会の人達と縁ができた。兵庫県樹木委員会にお願いしてシイ林を調べて学習した。誇るべきいいものがある自信から村づくりの機運が湧き上がってきた。住民の合意は何をしても自分達が楽しむ。背伸びしない。この二つだけ。それから情報提供していただきいろんな活動に取り組んでいる。自家のもんで活動資金を稼ぎ、あるものは活用する。やらないで後悔するよりもとにかく取り組むこと。地区から出た人や関わった人たちに情報をいただき、人手を得るために様々な事業を模索し取組んでいる。　（発表: 上谷俊道）

NPO法人　たんばぐみ
（まちなみ景観部会）（編集文責:横山）

669-3309　兵庫県丹波市柏原町柏原173
電話 0795(73)1171　FAX 0795(73)3801
www.tambagumi.com
Email: webmaster@tambagumi.com

「まちなみ景観部会」では、丹波地域の集落景観の保全と継承を目指して地域の里づくりを支援するとともに現在以下の取り組みを行っています。
○丹波まちなみ散策teku-tekuの開催（年4回）